

街の専門医 出張診療室

Vol. 56

『がん患者の 在宅緩和ケア』

いる、斎藤内科クリニックの斎藤忠雄院長にお願いした。

「末期のがん患者を在宅で診るに当たって、必要なことがあります。患者本人のケアと家族のケアです。」

まずは患者本人のケアですが、これは痛みのコントロールと心のケアが中心になります。がんが進行すると、激しい痛みに襲われることがあります。それではとても予後を穏やかに過ごすことができません。モルヒネなどの医療用麻薬を上手く使って、患者さんの痛みを取る

ことが重要です。心のケアは、患者さんの精神状態を穏やかに保ち、その人らしい寿命を全うしていただくために行います。次に家族のケアですが、これは心構えをつけさせることと、患者さんの薬の管理などです。心構えをつけさせることからお話しします。患者さんの病気が

が進行するにつれて、身体や精神の状態が変化してくることが予想されます。その段階によっての対処法をアドバイスしていきます。変わっていくことを動揺せずに受け止め、その都度、相応しい対処をとっていただくためです。

患者さんの薬の管理というのは、文字通りの意味です。どの程度の痛みには、どの薬をどのくらい飲ませるかなど、患者さんが穏やかに過ごすためにはとても重要なことです。

末期のがん患者というと、一昔前は病院で最期を迎えるのが一般的でした。

しかし最近では、政策や本人の希望などから、自宅で最期を迎える人が徐々に増えていきます。慣れ親しんだ自宅で、愛する家族に見守られながら逝くことが幸せな最期という考え方が増えてきているからです。家族が看取るというのは、ごく自然な形だと思えます。

私たちの仕事は、患者さんの尊厳を守り、その人らしい最期を生きさせていただくためのお手伝

いなのかもしれません」(談)

今回解説していただいた斎藤先生は、冒頭にも記したが午後の時間をすべて訪問診療に充てている。平成20年から末期がん患者の延命治療が中止になるなど、政策の変更に伴い病院を退院させられる患者も増えていく。それに対し、訪問で緩和ケアを施す医師やクリニックの数は圧倒的に少なく、待ったなしの状況まで来ている。訪問診療に対して、高い志を持った開業医が多数出てきてくれることを祈るばかりだが……

今月の担当医



斎藤内科クリニック院長
斎藤 忠雄氏

■医師データ
昭和57年、新潟大学医学部卒業。平成2年、新潟大学大学院医学研究科卒業。同年、米国アラバマ大(ミネソタ)八木校微生物学教室客員助教授。平成6年、新潟市高志にて開業。

末期のがん患者の中には、病院での治療を避け、最期は自宅で過ごしたいという人が増えている。そんな場合、絶対に必要となってくるのが訪問で緩和ケアをする医療チームだ。そこで今回は、この問題を取り上げる。解説は、外来診療は午前だけで、午後はすべて訪問診療に充てて

在宅療養支援診療所・緩和ケア診療所 完全予約制です。8:00~16:30
斎藤内科クリニック 外実体診日 木曜日、日曜日、祝祭日
 URL: <http://smc-kanwa.jp>

	月	火	水	木	金	土
午前9時~午後0時	○	○	○	○	○	○
午後	○	○	○	○	○	○

午後には訪問在宅診療・介護施設診療のみとなります。

TEL (025) 287-5800

〒950-0926 新潟市中央区高志4丁目20番5号

小規模多機能型居宅介護施設るびなす 訪問看護ステーションるびなす